2011年12月23日　毎日新聞　朝刊

回顧　震災と政治家 ❸

震災対応で自民党の実務者になった

谷公一さん(59)

「復興の鬼」の気概で

3月17日、石破茂政調会長(当時)から、震災対応を話し合う与野党実務者会合の自民党代表を命じられました。「谷さんは神戸の経験がある。定めと思って」と言われたのです。私は兵庫県職員として、阪神・淡路大震災復興にかかわってきました。「復興の鬼」となる気概で臨みました。

5月からは衆院東日本大震災復興特別委員会の理事として、復興関連法案の修正協議にあたりました。最も厳しかった協議は、8月中旬から3カ月続いた二重ローン救済法案です。政府案は救済範囲が狭く、零細企業や農業、水産業者を救えない。自民党は法案を提出しましたが、与野党協議は平行線でした。被災地から「融資に厳しい条件が付けられ、再建資金が借りられない」と、苦境を訴える声が次々届きました。

9月末、民主党の近藤洋介理事に「政府案に口出ししないから新法を作って」と、政府案と野党案の併存を持ちかけました。党内や野党間で「被災地が混乱する」という意見も出ましたが、「100点は取れない」と説得しました。このままでは救済が遅れるだけ。ベストでないがベターな案を作ろう、と割り切らざるを得なかったのです。

11年度第3次補正予算が成立したことで、党内には「協力は一段落した」という雰囲気が出ています。でも、復興は終わりではない。内閣の姿勢は追及すべきですが、復興にはとことん協力すべきです。それが自民党への信頼回復につながると考えています。

【聞き手・吉永康朗】

＝つづく